

第3号様式

令和7年度第3回船橋市生涯学習基本構想・推進計画検討委員会 会議録

(令和8年4月28日作成)

1 開催日時

令和8年3月23日(月曜日) 午後3時00分から午後4時36分まで

2 開催場所

市役所本庁舎 6階 602会議室

3 出席者

(1) 委員 明石 要一、辻 大士(※)、五藤 美枝子、奥住 恵子、
草野 滋之、沼波 規子、栗山 裕真(※)

※オンライン参加

(2) 事務局 社会教育課長、社会教育課長補佐、その他社会教育課職員

4 欠席者

竹迫 和代、長尾 常史、水野 恭成

5 議題及び公開・非公開の別並びに非公開の場合にあっては、その理由

・ふなばし一番星プランの構成案について(公開)

6 傍聴者数(全部を非公開で行う会議の場合を除く。)

0人

7 決定事項

・議題について、質疑応答及び意見聴取を行った。

8 議事

午後3時00分開会

○明石委員長

それでは、ただいまより、令和7年度第3回船橋市生涯学習基本構想・推進計画検討委員会を開きたいと思えます。

ここでは、会議の公開及び傍聴についてご説明させていただきます。

本会議につきましては、不開示情報が含まれておりませんので、船橋市情報公開条例第26条に基づき公開となります。また、会議後は会議録を作成し公開しますが、その際には委員の皆様のお名前も公開となりますので、ご承知ください。

なお、会議の開催につきましては、市のホームページで開催日程等を事前に周知していることをご報告します。

続いて、傍聴でございます。本日の会議において傍聴を受付しましたところ、傍聴者はいませんのでご報告いたします。

では、早速、本日の議事に入らせていただきたいと思います。

次第の1「ふなばし一番星プランの構成案について」でございます。

事務方よりご説明をお願いします。

○社会教育課長

社会教育課長の藤井です。少し長くなりますけれども、配付資料に沿ってご説明をさせていただきます。

まず、資料1、横長の資料の2ページをご覧ください。

ここでは、現行のふなばし一番星プランの構成をまとめておりますが、基本構想は令和4年度から13年度まで継続しますので、令和9年度からの推進計画の策定に当たりまして、今回の会議では、基本構想以外の構成案について委員の皆様からご意見をお伺いしたいと考えております。

3ページをご覧ください。まずは、前回の会議概要を振り返りたいと思います。

4ページをご覧ください。前回の会議では、「生涯学習に関するアンケート調査」の単純集計結果をご覧くださいながら、委員の皆様からご意見をいただきました。今回の資料では、生成AIも使用しまして、いただいた意見を項目別に整理してまとめましたので概要をご説明します。

まず、「生涯学習の認知・浸透」に関して、「生涯学習」という言葉・内容が市民に十分浸透していないということについて、「若い人たちは生涯学習とは意識せず学んでいる」「参加者側が『生涯学習』という言葉を知覚する必要があるのか」といったご意見がありました。

次に、学習参加率に関しては、継続して何かを学んでいる割合が目標値に達していないことについて、講座への不参加理由として、「時間の余裕がない」「希望の内容でない」「一人で参加しづらい」といった理由が共有されました。

5ページをご覧ください。「デジタル・情報格差」に関して、「オンライン学習・自宅学習ニーズが増加している一方で、デジタルを活用できる人とできない人の格差が生まれる懸念がある」「ホームページでは見てほしい相手に見てもらえないことがある」「対面だけでない、デジタル公民館があってもいい」「学習スタイルに変化があり、新しい学びの形態に対して、生涯学習としてどのような対応をしていくのか」「オンラインならではの生涯学習の充実やインターネットに関する意欲向上を進めたほうがよいのではないか」といったご意見がありました。

また、「経済的困窮層への対応」に関して、経済的に苦しいと感じる市民が3人に1人という結果に対し、「経済的に苦しい層ほど生涯学習に参加していない」「経済的に苦しい層にどのような学習のツールや機会を提供するかが大事になる」といったご意見がありました。

6ページをご覧ください。「現役世代へのアプローチ」に関しては、現役世代は学習ニーズが高いが、市主催講座を「知らなかった」という回答が多いという結果に対して、「現役世代に対するメッセージをどう出していくかが大事」「参加しやすく、楽しいと思えるつながりが必要」といったご意見がありました。

学習時間帯については、高齢者は午前中を好むが、現役世代は21時以降を好む傾向があり、多様化していることも共有されました。

また、「地域コミュニティ・孤立」に関して、「孤立化という問題が地域社会の中で深まってきているのではないか」「生涯学習が困ったことの解決に寄与できるということを出していく必要がある」というご意見や、「いいとわかっていてもできないことがたくさんあるが、参加してもらうことが大事である」というご意見、「外国人との共生に関する不安・ニーズが6年前より約1.5倍増加しており、これまで以上に共存が大事で、親和性を持つ方向にシフトする必要がある」といったご意見がありました。

7ページをご覧ください。「公民館・施設運営」に関しては、公民館等の生涯学習事業・施策を「利用・参加したことがない」が66.8%、生涯学習環境への満足度が低く、「どちらともいえない」が73.3%という結果に対して、「オンラインやSNSを活用したプッシュ通知型の発信もメリットがある」「学ぶ環境がもう少し改善されることで、学習する人の割合も増えるのではないか」といったご意見がありました。

また、「計画策定」に関して、「現行の計画の目標値の達成に向けた施策の再検討が必要」「リーディングプロジェクトの取扱いの方向性が未定」「人口推移・施設利用者数・社会教育関係団体数の減少傾向を踏まえた計画の更新が必要」といった状況を共有しました。

「新しい時代の悩み事・困り事の洗い直しや解決が社会教育の原点かと思う」といったご意見もいただきました。

前回の会議概要については以上となります。

また、前回の会議で、事務局でお答えできずに持ち越しとなっていた事項がありましたので、それについてご説明いたします。

資料2です。縦向きのA4判の資料をご覧ください。

まず1点目、明石委員長よりご質問いただきました令和7年度公民館文化祭参加者数についてお答えいたします。

1ページをご覧ください。文化祭は、資料1、19ページにもあります「地域における交流機会の創出」につながる事業の一つです。毎年10月から11月にかけて各館で実施しており、令和7年度は、改修工事のため休館している2つの公民館を除いた24公民館で実施し、5万8,818人の方が参加してくださいました。

文化祭は、ふだん公民館で活動しているサークルの発表や作品展示がメインとなり、また、地域の学校の部活動の発表や作品展示、運営ボランティア、模擬店の出店など、下段に記載してありますような団体と連携を図りながら、公民館ごとに地域の特色を生かした文化祭を実施しています。

続いて、同じく明石委員長からのご質問にありました公民館事業の発信状況についてです。資料は2ページから4ページになります。公民館が事業を実施する際に活用している発信方法をまとめました。また、参考に、いくつか事業のチラシなどを載せさせていただいています。広報ふなばしや公民館報などの紙による発信や、公民館 Facebook などのオンライン発信の両方を活用しております。

市のホームページや公民館 Facebook については、記事ごとの閲覧数しかわからないのが

現状です。公民館職員に聞き取りをしたところ、広報ふなばしやちいき新聞の掲載後には問合せや申込みが増えるとのことでした。

続いて、辻委員からご質問をいただきましたアンケート項目の中で「あなたが利用したことがある生涯学習施設はどれですか」の問いに対しての回答で、「子育て支援センター・児童ホーム」の回答割合が増えたことについてです。

資料5ページをご覧ください。前回の会議で、若い世代の回答率が増えたことが要因ではないかと私がお話をしましたが、分析をしたところ、どの世代も回答は増えていましたので、それは要因ではなかったものと考えております。

今回、アンケート調査を作成する際に、関係各課に調査票の内容について意見を伺ったところ、前は子育て支援センターのみだったところに、「児童ホームを追加してほしい」というような回答を関係課からいただきましたので、今回の令和7年度アンケート調査に項目を追加いたしました。

市内には児童ホームが21か所ありますので、児童ホーム利用者の選択肢が明確化されたことによりまして、回答割合も上がったものと考えられます。

前回の持ち越しの説明については以上になります。

すみません、資料が行き来して申し訳ないのですが、また資料1に戻っていただいて、8ページをご覧ください。

続きまして、別紙でアンケート調査報告書、分厚いものをお配りしていますけれども、そこから見えてくる課題等についてご説明させていただきます。

9ページをご覧ください。「生涯学習に関するアンケート調査」の結果報告書についても生成AIを活用しまして、そこから見えてくる課題等を項目別に要約させていただきました。

先ほど説明した内容と重複する部分もありますので、そこは飛ばしながら説明をさせていただきます。

まず、「学習参加率の低迷と二極化」について、経済状況が「大変苦しい」層と「大変ゆとりがある」層との学習参加率に大きな差が生じている。健康状態が悪い層も参加率が低いといった結果でした。

次に、「現役世代の参加障壁」について、「自由な時間が不十分」と感じる割合が多く、学習しない理由として「仕事が忙しくて時間がない」などが上位で、現行の事業提供と希望する学習時間帯とのミスマッチが生じているといった結果でした。

また、若年層の生涯学習への低い関心・認知に関しては、若年層の生涯学習への関心が低く、情報も届いていない状況という結果でした。

10ページをご覧ください。次に、「市の事業・施策の認知度・利用率の低さ」に関して、船橋市の生涯学習への満足度が「どちらともいえない」が73.3%と多数を占めている。市民にとって関心のある事業・施策が不足している可能性があります。

また、「情報発信・広報の届き方の問題」に関して、「知っていたが参加しなかった」の

理由に、「自分の希望に合った内容ではない」や「一人では参加しづらい」が挙げられていることから、情報の質や届け方に課題があるのではないかと考えております。

また、便利だと思える生涯学習の情報を得る方法では、若年層はSNSやインターネットの割合が高い一方、高齢者は広報ふなばしの割合が高く、世代によって情報取得手段が大きく異なり、一元的な広報では届かない層があるといった結果でした。

「学びの成果を活かせていない」に関しては、「学びの成果を自分以外のために活かしている」割合は11.1%でした。「どのような活動に活かせるかわからない」や「活かせる場所が見つけれない」という理由が挙げられていることから、学習と社会参加をつなぐ中間的な支援、マッチング機能の欠如が課題であると考えられます。

11 ページをご覧ください。次に、「地域間格差の存在」に関して、市主催の講演会等を「知っていた」割合だけでなく、学習活動をしている割合についても地域間格差があり、地域によって生涯学習環境の充実度に大きなばらつきがあるといった結果でした。

また、居住年数が浅い層・転入者へのアプローチ不足に関しては、市の講演会等を「知っていた」割合だけでなく、公民館サークルの認知度についても居住年数によって大きな差があり、転入者や居住歴の浅い市民が地域の学習資源にアクセスできていないことが考えられます。

「高齢者の孤立・地域コミュニティの弱体化」に関して、居住地域の心配事として、「地域内の人と人とのつながりが薄いこと」や「高齢者の孤立」が上位に挙げられている。心配事を解決するための取組が地域のコミュニティにつながっていけるとよいのではないかと考えております。

アンケート調査結果報告書については以上となります。

次の12 ページをご覧ください。ここからは、前回の会議概要やアンケート調査の結果を踏まえてどのような施策を設定するかという、今回議論いただきたいテーマに関することについて説明させていただきます。

13 ページをご覧ください。前回の会議でもお示ししましたが、現在の推進計画の体系を掲載しています。新しい推進計画ではどのような施策を設定していくかを考える必要があります。

次の14 ページをご覧ください。全ての施策の説明はできませんが、主なものについて順次説明してまいります。

まずは、「多様な学習ニーズへの対応」に関して、施策ごとに現在の対応する取組を記載していますが、いくつか論点となると考えた部分には吹き出しをつけています。

「1. 新たな学習スタイルへの対応」については、デジタルデバインド対策の推進としてスマホ講座等を公民館などで実施してきましたが、初心者向けの内容が中心となっており、事業開始当初より参加者が減少傾向にあるため、それを継続するかという課題があると考えています。

また、「4. 再チャレンジする人への学習支援」については、リカレント教育の推進をし、

人生100年時代への対応としてスキル獲得等につながる講座を実施していますが、実施する施設によっては参加者がなかなか集まらず、ニーズの把握やテーマ設定等に課題が感じられています。

15ページをご覧ください。施策2「充実した学習機会の提供」に関して、次の16ページにかけて、施策ごとに、現在の対応する取組を記載しています。吹き出しはつけておりませんが、こちらについてもご意見があればいただきたいと考えております。16ページも施策の記載がございます。

続きまして、17ページをご覧ください。「充実した学習のための環境の整備」に関しては、「1. 学習に関する情報提供の充実」について、「楽しく学ぼうふなばし」という生涯学習ガイドブックを発行し、市内で実施している講座の情報等を冊子にまとめていますが、ニーズに合った情報発信手段となっているのかという課題があります。

「3. 学習相談体制の整備・充実」について、現在、公民館で学習相談を受けておりますが、新たに学習相談の窓口を設置する必要があるかという課題があります。

「4. 生涯学習施設の充実」については、公民館などの各施設の充実に取り組んでいますが、利用したことがない市民が多い中で、どのようにニーズに合った施設として充実させていくかという課題があります。

18ページをご覧ください。「地域・社会で活躍する人材・団体の育成と支援」に関して、「2. 地域・社会で活躍する団体の育成と支援」については、公民館などで活動を行う社会教育関係団体の数が減少傾向にある中で、これまでのサークル見学会などの取組のみで足りているのかという課題があります。

19ページをご覧ください。「『つながり』を育む学習・活動の推進」に関して、「1. 地域課題に関する取組の推進」については、地域課題に関する学習と活動の推進として地域課題発見・解決事業を公民館で実施しており、地域課題を発見したり、解決するための事業を実施する団体に対し、事業に係る講師謝礼金を市が負担していますが、効果的な取組となっているのかという課題があります。

また、「3. 地域における交流機会の創出」についても、公民館文化祭などを実施していますが、前回の会議でも話題になっていた部分でもあり、後ほど、現状も含めて説明させていただきます。

次の20ページをご覧ください。最後に、「学びの成果を活用するための環境の整備」に関して、「2. 活動へつなげるコーディネート機能の強化」として、生涯学習サポート事業を実施しております。自分の技能や知識をボランティアとして活かしたい人を講師として登録し、何かを学びたい人を紹介しておりますが、利用実績が少ない状況です。団体・人材の効果的なコーディネート方法があるかという課題があります。

基本施策については以上となります。

21ページをご覧ください。続きまして、リーディングプロジェクトの取扱いについて説明します。

22 ページをご覧ください。リーディングプロジェクトについては、現在の前期計画の中で先導的に取り組む必要があると考える内容を明確化し、優先して取り組んできたものになります。

次の 23 ページをご覧ください。リーディングプロジェクトの今後の取扱いについて、令和 8 年度末で前期計画の期間が終了するため、後期計画に向けて見直しをする必要があります。前期で終了するもの、後期も継続して取り組むもの、また、新たに追加して取り組むものなどについて検討する必要があります。

資料の説明は以上です。

10 年間の基本構想は変わりませんので、これから策定する後期計画も、現在の前期計画と大きな方向転換はないものと思っておりますが、前期計画中の取組や社会状況の変化に合わせて、新たに追加すべき施策や見直しが必要な取組もあると考えております。前回会議のご意見、アンケート報告書の結果等を踏まえて、本日は計画の構成案、主に施策体系とリーディングプロジェクトについてご議論いただければと思います。よろしくお願いいたします。

説明は以上です。

○明石委員長

藤井課長、ありがとうございました。

今の課長のご説明、特に A I を使って前回の会議の勘どころをうまくまとめてくれていて、新たにアンケートの結果のエッセンスをご紹介していただきました。それを踏まえて、推進計画の体系の現行案のご説明がありました。

各委員の方々に、これまでのご説明についてご質問、ご意見があればお願いします。

ちょっと私のほうで。資料 2 がありますね。貴重なデータをありがとうございました。公民館が 26 あるんですね。

○社会教育課長

26 館です。

○明石委員長

それで、文化祭参加者は全部で 5 万 8,818 人で、船橋の人口は約 63 万人でしたか。

○社会教育課長

65 万人です。

○明石委員長

そうすると、約 1 割の方が参加していると考えていいんですね。公民館利用者が 1 割と多いのか少ないのかというのは、これは議論の余地がありますけれども、ちょっと頭に置いておいてください。

そこでちょっとお願いしたいのは、26 館あって、参加者の多いのが、例えば宮本公民館が 5,200 人、少ないところで申しますと、北部公民館 1,300 人、高根公民館は 1,000 人ちょっと、新高根公民館もそうです。この数値の違いというのは、収容人数のことなのか、パ

ッページは一緒だけれども差があるのか、そういう分析は事務方でやっていないですか。

○事務局

事務局でございます。地区の人口によってというのもあると思いますし、文化祭の人数のカウンターの仕方、公民館ごとに少し違っているところがあるかと思います。

講堂の発表の時間で言いますと、発表を開始したときにいる人数でカウントをしたりですとか、出入りも激しいものになりますので、それをどういうカウンターの仕方をしているかというところで、ちょっと人数の差も出てきているのかなと思っております。

○明石委員長

公民館にとって、文化祭というのは大きなイベントと考えていいですね。相当、館を挙げて、エネルギーを集中していますよね。そのときに、26館の中で館長さんの前職はどういう人か、教員上がりなのか、行政の定年を過ぎた方なのか、本当に下から上がってきて自前で来た方なのか、そういうデータはありますか。

一番困っているのは、学校の先生をした方で、学校教育は詳しいけれども社会教育はほとんど関係ない、という方がいます

だから、館長さんのキャリアは、もしデータがあればいつか示してほしいんです。その人事はどうやっているか。

私、千葉市に住んでいますけれども、45館ぐらいで半分ぐらいが学校の先生です。校長先生を終わった方。本当にいい先生はすごくいい。悪い場合もあるんです。その辺、船橋はどうなっていますか。

○社会教育課長

すみません、数字としては持っていないのですが、今わかる範囲で申し上げますと、船橋市の公民館の館長は、基本的に皆行政の職員です。

○明石委員長

行政で、教育委員会ではなくて、例えば市長部局から行った方もいらっしゃるんですね。

○社会教育課長

はい、おります。一般事務という採用になった職員が全部です。公民館勤務が長い職員、いくつかの公民館を異動して経験を積んで館長になったという職員もいますし、市長部局であったり、教育委員会の事務局の事務職員などを経験してから館長として着任している職員もいます。

○明石委員長

私が要望したいのは、仮に文化祭だけでもいいのだけれども、それ以外に公民館の活性化と館長さんの職種で結びつきがあるかないかを調べていただきたい。

行政の方でも、若いときに公民館に出向していてよく知っている人のときは面白いとか、あります。今後、やはり人事で考えていただくと、公民館が地域の拠点になり得るということも提案がありますので、公民館の活性化をするときに何に注目すればいいかをちょっと頭に置いていただくといいかと思います。

○社会教育課長

承知いたしました。公民館での経験を見たいと。

○明石委員長

要するに、この数字の説明を何をもってすればいいかというので、その一つは公民館長もあるかなと思ったのでお願いしたんです。

全てではないと思う、いろいろなファクターがあるのだけれども、公民館長さんのキャリアパターンでどう影響するかというのがデータで欲しいかなと思ったんです。

○社会教育課長

承知いたしました。

あと、やはりどうしても地区によって周りに住んでいる数が違うので、その影響も大分これには出ているかなとは思いますが。

○明石委員長

それは公民館主事さんの人数によっても変わってくるし、地域の雰囲気もありますから。様々なファクターがあると思うんです。

○社会教育課長

わかりました。これを基に、もう少しいくつかの視点から分析してみたいと思います。

○明石委員長

せっかく貴重なデータをいただいたので。ありがとうございます。

○社会教育課長

ありがとうございます。

○明石委員長

それから、公民館事業の発信方法も、かなりこういう形で上手に出してくれているところもあるので、これも非常にありがとうございました。非常に貴重なデータをいただきました。

それでは、各委員の方々。

まず、奥住さん、何か。

○奥住委員

青少年相談員の奥住です。

私が所属しているのは西部ブロックというところで、公民館だと西部公民館、法典、丸山、塚田、葛飾辺りのところにたくさん行くんですけども、学校から近い公民館は結構参加してくれる人が多いかなというイメージがあります。お友達に誘われて来たとか、それこそ、こども食堂に参加している子が「私がいるから来て」みたいなことで来てくれることが多いのかなという印象があります。

あとは、どこかは忘れてしまったんですけども、丸山、法典、塚田のどこかが、住宅街の近く、ど真ん中にあるところがあって、そういうところだと結構参加してくれる人が多くて集まりやすいですけど、今、そこら辺の地域に相談員がいなくて、うまく公民館の

イベントとかができなくて、相談員のほうでも困っているという状況ではあります。

○明石委員長

奥住さん、ちょっとお聞きしたいのだけれども、青少年相談員をされていますよね。そのときに、経済的に余裕のない青少年の悩みというのは、何かあなたのところに来るのでしょうか。それとも、相談員のところへは来なくて、自分で悩んでいるのでしょうか。

今回、全体で3割の方が経済的に不安定な方がいるのだけれども、青少年の中で経済的に不安定な方が相談員のところに相談に来るか来ないかということが、もしありましたら、お願いします。

○奥住委員

相談には来ないです。青少年相談員は、やっていることが無料のイベントなどが結構多いので、そういった相談はあまり受けません。

○明石委員長

そうすると、あなたの立場から見て同じ世代の方が、昼間は忙しいのだけれども、勉強したいニーズは高い。20代から50代まで。それで、できたら夜の9時以降にそういうチャンスがあれば参加したいと言っているのだけれども、その辺、どうすればいいですか。若い人向けに学びの情報提供をどうすればいいかということで、意見がありましたらお願いします。

○奥住委員

1回目の会議でも、公民館の使用者数が下がっているというお話があって、前回、2回目は私が出られなかったんですけども、考えてきました。公民館に図書館的な学習スペースがもっとあったら来てくれる人が増えるのではないかなと。ただ単に自習スペースとかではなくて、遊ぶスペースと勉強するスペースが分かれていたほうがいいと思うんです。

家で勉強できない人だと、多分、静かなところがいいという人が多いと思うんですけども、公民館で、遊ぶ人もいる中で勉強となると、うるさくて集中できないというのがあると思います。図書館と似たような空間を公民館にまた少しつくれたら、イベントに参加ではなくても普通に勉強しに来てくれて、その人たちが公民館に貼ってあるチラシなどを見て、「こんなイベントあるんだな、来てみようかな」につながるのではないかなと思いました。

○明石委員長

ありがとうございました。

沼波さん、中央公民館の運営審議会をされていますけれども、この提案の中のリーディングプロジェクトでは、5番目に地域の拠点として公民館の充実があるんですよね。そのときに、昼間もやっているけれども、夜間の事業の実施とか利用基準の見直しなんていうのも検討する課題にあるのですが、どういうふうにお考えでしょうか。

○沼波委員

沼波と申します。よろしく申し上げます。

今、委員長がおっしゃったこの区域は南部になるのですけれども、中央、浜町、宮本、海神、ここを私は担当させていただいているのですけれども。

○明石委員長

元気ですね、ここは。

○沼波委員

そうですね。今、奥住さんがおっしゃったことは、たまたまこの間の会議で出たのですけれども、子供の勉強のスペースは、中央に関して言うと、例えば海神は中に図書室があります。宮本は児童ホームもついていますし、浜町も図書のスペースが中にあるんですね。中央は今ちょっと改修中ですが。ただ、やはり住んでいる人口の数に対してスペースは狭いというのは挙げられると思います。やはりそういうところを使うお子さんは、割と1回で終わらず何回か、リピーターになるわけです。そうすると、スペースの問題があって、なかなかそれを確保するのは難しいのかなと。

ただ、課題として今おっしゃったのはみんな思っているんですよ。ですから、審議委員のほうでもそういう意見が出ました。

この間、中央が今使えませんので、浜町で委員会がありました。浜町に行ったことがある方はわかるかと思いますが、すごくオープンなんです。入ったところに椅子やテーブルも置いてあるし、縁台をすごく大型にしたような、板張りで4畳くらいあって、ちょっと上がっていろいろなことができるスペースがあります。平日でも午前中とかは若いお母さんが小さい子を連れてそこで遊ばせていたり、午後になると、学校から帰ってきた子供たちが、行く場所のない子なのかなと思いますけれども、そういう子供たちがちゃんと勉強をしている。そういうスペースはどこの公民館も必要でしょうけれども、やはりスペース的にもっと充実を図る必要はあると思います。

この4館に関しては、結構いろいろな意味で利用はされていると思います。夜間に関しても、お勤めの人たちのお仕事が終わってからのメニューも考えられています。それはどこの館も考えているとは思いますが、よその館のことは知らないのでもわからないのですけれども、私がやらせていただいている4館に関しては、ちゃんと若者層、老人層と分けた中でプログラムもつくられています。

ただ、やはり先ほどもあった、20代から50代の人たちは、基本、勉強がある、仕事があるで、なかなか利用にまで、よほど自分の学びたいものがないとスルーされてしまうんですよ。でも利用としては、十分と言っていいのかわかりませんが、メニュー的にも私は充実していると思います。

ただ、他方の公民館に行くと、先ほどもあったように住宅地であったり、人口の規模が詰まっていますから、利用する人たちも、お仕事の帰りだと、逆に職場からそこへ行くまでの時間もありませんよ。それが中央でしたら、降りた駅ですぐ講習を受けられる。そういう時間的なロスなんかも影響して、やはり少なくなっていくのは仕方ないのかなと思います。

子供のことは、いつも話題に上がります。もうちょっと大人が関わって何かできるとい
いねと、この間も同じような意見が出ましたので、私としては、その辺を今大切にしたい
ところかなと思います。

○明石委員長

ありがとうございました。

では、五藤さん、船橋の生涯学習コーディネーターをされているのですけれども、多様
な学びが増えつつありますよね。そういう多様な学びになかなかうまく提供できていない
というマッチング的なミスと、もう一つは、学んだことを社会に還元したいけれども、な
かなか方向が見えていない。そういう学びと成果の問題とか、学び方の方法のマッチング
ミスが多いですけれども、コーディネーターとして、どこを攻めていけば船橋の活性化に
つながりますかね。

○五藤委員

五藤美枝子です。よろしくお願ひいたします。

私自身も、住み始めてから五十何年住んでいるのですけれども、ただ、船橋のことの何
がわかるかという、自分が 65 歳まで、朝早くから夜遅くまでという生活をしていたので、
65 歳から船橋のことをもっと知ろうということで、コーディネーターをやらせていただい
ています。

私は、自分で講師登録をしたりして、会社の中で講演会とか講師とかをやらせていただ
いたので、まさにと思っているのですけれども、おとし、リカレントというテーマがあったの
で、リカレントを公民館でやりましょうと。一番いい年齢の、これから自分の人生を考え
るといふ 40 代、50 代、その辺りの人に来ていただきたいねと。でも、なかなか計画しても
来ていただけることとは違う。必要なけれども、時間帯がどうなのか。そういうこと
を、おとし、館長と。

私は公民館で言えば東部におりますので、東部公民館、三田公民館、習志野台公民館、
飯山満公民館、薬円台公民館、それから北部公民館ですね。この辺りが私のコーディネ
ーターとしての自分のところなののですけれども、やりたいもの、必要なものと集客がなかな
かうまく行かない。

見てみると、どの公民館も、公民館独自で企画しているものもあれば、コーディネ
ーターが一生懸命いろいろなものをつくり上げてやっているところもあるし、シニア向けの
何々会ということでやっていることもある。いろいろなことはやっているのだけれども、
じゃあ本当に満足度が行くのかという、なかなかできないでいる。これを見ても、みんな
ないわけじゃないけれども、じゃあ十分な人数が集められているのかという、なかなか
難しいのではないかと思います。

私が 1 回目、2 回目と参加させていただいてすごく思ったのは、じゃあ夜の 9 時がいい
んじゃないか、遅い時間だったら来てもらえるんじゃないか、参加することは難しいから
オンラインにという意見もたくさん出ていました。必要なものは、みんなすごくよくわか

るのだけれども、つくって、じゃあ誰が来るのというところ、やはり集客の問題とそれが同じ動線にならないと、新しいものをつくっても参加人数が少なかったら結局は伸びないのではないかなと、やはりそれが心配です。

だから、やはりみんなで協力してということはとても大事ですけども、具体的に、広報を見ていてもいっぱい載っているんですね。公民館側から言うと、今回はもういっぱい載っていますから、うちの公民館では1つしか駄目ですよとか、2つしか載せられませんよと、非常に小さい枠の中でどういうふうにコンパクトに載せたら来ていただけるかというのがすごくあるんです。

薬円台で、去年とおととしとやったのですごく人気だったのは、木の切れ端を集めて、船をつくったり、車をつくったり。夏休みにそういう協会をお呼びしてやったのは、各小学校の応援もあったりして、すぐ満席になりました。タイミングと欲しいものが一致すると、案外すごくうまくいったりするのかなと。いつ、誰を対象に、どうやってやるかということが、これを見ていてもすごく。

もう一つはスマホ教室で、もう2年ぐらい前に、友達がスマホ教室に行き始めたんです。すごいタイミングでスマホ教室がいっぱいになった。そういうタイムリーなもの。今オンラインにしましょうといっても、Zoom で入れませんか、何に入れませんかという人がいっぱいだったら、それを企画してもやはり難しいので、併せて、その前段階の準備が必要なのかなと。

いつ、ターゲットは誰で、その人はどういう状況だったら参加できるのかを、若い人もそうだし、子育ての人も、シニアも、それを見極める必要がすごくあるのかなとは思いません。

○明石委員長

ありがとうございました。

では、Zoom の栗山さん、データでは、若い人が市の主催の講演会を「知らなかった」というのが 84%もあるんです。どうすれば若い人に市の主催事業や公民館の主催事業が伝わるかという方法を、もしいいアイデアがあればお聞きしたいのですけれども。

○栗山委員

市民委員の栗山です。

僕として一番思うことは、公民館事業の発信方法にちょっと問題があるかなと。どうしても、学校だよりとかそういうものは、高校は船橋市外の高校に行かれる方もとても多いですし、そういう意味で言えば、中学校等でも私立の中学校に行ってしまうと市外の方になってしまうので、そういうところの方々には届きづらい。

ほかにも、そもそもSNSでいくと、Facebook であったり、Xであったり、そういう手段というのは、正直、今の若年層は、使っている方もいらっしゃると思うのですけれども、若年層に届けるという意味でしたら、Facebook ではなく、同じ Meta 社になってしまうのですが、Instagram など若年層により届きやすい発信方法にシフトしていく。Instagram

の内容もより若者向けにするというか、ご老人方への発信方法と同一にするのではなくて、若者向けに特化したSNSとしてInstagram等を活用するのもよいのではないかなと思いました。

○明石委員長

ありがとうございました。

辻先生、お聞きしたいことは、生涯学習の場合は地域や青少年問題が多いのですけれども、このデータを見たら、スポーツ関係や文化関係のプログラムが欲しいという数値が高いんです。その辺、先生の専門から考えていかがでしょうか。スポーツ関係の講座を組むにはどうしたらいいか。

○辻委員

ありがとうございます。辻です。

確かにスポーツなどは、もう既にされている方々は、やはり自分自身でそれなりの月会費なり年会費なりを払って行ける人は行っていると思います。一方、そういったものが負担になって行けない人たちが一定数いると思いますので、そういった方々に届くような、比較的low価格で参加できるような企画といますか、教室といますか、そういったものを準備してうまく届けば、そういった方々の参加も増える可能性はあるのかなと思います。

これと関連してなのですが、先ほど明石委員長がおっしゃったとおり、地域差に着目するというのは、とても大事なことです。若い人であったり、あるいは経済的にちょっと苦しいと感じている人たちでも、参加できている人が多い地域が恐らくあると思います。そういった地域を見つけ出して、どうしてその地域ではそういった人たちでも参加が多いのかといったことを、その地域の公民館の担当者であったり、あるいは実際に参加している人たちの声を聞いてみて、この地域はだから参加が多いんだというヒントが得られれば、ほかの地域にもそれを広げていく手がかりが得られるのではないかなと思いました。

○明石委員長

ありがとうございました。

個人的には、船橋は野球も盛んだし、サッカーも盛んだし、千葉ジェッツもあってバスケットも盛んだから、スポーツを観戦して、面白いよ、楽しむんだ、という講座とか、スポーツをやるのではなくてスポーツを観る楽しみ、行ってみる楽しみ、そういう講座も公民館で出してくれれば、少し裾野が広がって、もっと幅広くなるのかなという思いでお聞きしました。

船橋は非常にスポーツ市というイメージがあるので、社会教育でも、そういうプログラムを先生方が提案してくれるといいかなと思って質問しました。

○辻委員

ありがとうございます。観るスポーツを広げるというのは私も大賛成です。今年に入ってから、私も、スポーツを観ることが、その後の人と人とのつながりであったり、あるいは、スポーツ以外の地域活動参加にどれぐらいつながっているか、みたいなことを分析し

ました。その結果、日頃スポーツをやっていない人であったとしても、スポーツを観ることによって、3年後につながりが醸成されていたり、趣味の活動やほかの地域活動への参加も増えていたりすることが確認できました。そういったスポーツを観るということの一つのきっかけとした講座というのは、ありなのかなと感じています。

○明石委員長

ありがとうございました。

では、草野先生、前回の会合でも、やはり経済的に困っている、困り事を抱える方が多いと指摘されました。この前申し上げましたように、それを公民館の中の非常に大事な活動だと思っているんですよね。それで、データでは、経済的に余裕があり健康に自信があれば学習しているんですよね。非常にいいデータが出ています。そうすると、この3割の方々や、また外国籍を持っている方々に対するサポートを含めて、いい施策がありましたらお願いします。

○草野委員

確かに、公民館の現状を見ると、一部、まさに健康であり、ある程度時間的にも精神的にも余裕があって、学歴も比較的高いとか、かなり偏りがあると思います。実態としてもそうだと思いますけれども。

そういう中で、本来であれば、公民館というのは、地域の中にあって誰もが利用できて、気軽にそこに行って交流をしたり、学習をしたりと、そういう理念の下につくられて戦後80年ぐらいやってきたわけですけども、以前からも、公民館が一部の利用者に限られてしまっているのではないかという現状はずっと続いてきたわけです。

いろいろな努力、いろいろな試みが、これまで船橋市でもやられてきたと思いますし、他の自治体でもいろいろな試みが行われてきたと思います。前回の会議で、私は公民館の相談機能ということをちょっとお話ししました。よろず相談所というふうな形で、いろいろな困り事、悩み事、心配事、そういうものを気軽に打ち明けたり、相談したりできる、福祉とも関わると思うのですけれども、公民館の持っている相談的な機能が必要なのではないかと発言をしました。

やはり、戦後の公民館の歴史を見た場合に、社会教育という——教育というか学習に、もちろんそれが中心ではあるのだけれども、もう少し膨らみを持った、これは社会教育法にも地域福祉の向上ということが書いてあるのですが、そういう機能、あるいは文化ということで、社会教育法の第20条にも、実際生活に即した文化的教養を形成する、それが公民館の、社会教育の本来の意味なんだということが書いてあります。

そういう福祉とか文化、あるいはまちづくりの問題もそうですけれども、教育・学習ということを少し広げた形で、地域の人たちのいろいろな生活に関わることに對して、対応していったり、相談をしたり、あるいはそれを受け止めていくような、公民館の持っている懐の深さというものが、今求められているのではないかなと感じているんです。

個人的な悩みを気軽に相談はしにくいとは思っているのですけれども、何か公民館の持ってい

る機能を少し広げて考える。幅広く、懐の深いものとして考えていくようなことが必要になっているのではないかと、改めて今思いました。

○明石委員長

貴重な意見、ありがとうございました。

そうすると、先生のおっしゃるような内容を良くするためには、公民館主事の方々の発想を変えるか人材育成をしていかないと、言葉は悪いですけども、従来の狭い意味の社会教育だけやっていると、多分、水が届かないということがある。これからは、やはりそういう相談機能ができる、幅広いネットワークを持った人材育成が求められるかなと、今、先生の話をお聞きして思いました。ありがとうございました。

それでは皆さん、もう一つ思うことは、公民館とか市の社会教育課が情報発信をしていますよね。発信しているんですよ。それがうまく届いている世代とそうでない世代があるのだけれども、今後、今の多様化している 20 歳以上の方々に対して、どういう情報の提供をすればいいかをちょっとお聞きしたいんです。

まず、奥住さん、どうですか。公民館とか市とか、いろいろな公の情報が来ますよね。若い人から見て、スルーするのか、スルーはしないけれども、情報はキャッチするけれども、何かハートに火がつかないのか、その辺、どうでしょう。

○奥住委員

私は学校や公民館からの資料が配られても、あまり目は通さない派でした。なので、その手紙を親が見て、「楽しそうだから行ってみてごらん」と言われて、近所のお友達と一緒にいくということが多かったです。

私も青少年相談員で小学校に配るチラシの仕分けを一緒にやっていて、チラシを見て思うのは、ちょっと難しい漢字などもあったりするので、小学生、参加してくれる層の人が見られる手紙、見たいと思うようなチラシづくりができれば、もう少し参加したいと思う人が増えてくれるのかなと思いました。

○明石委員長

同じ市民委員の栗山さん、お若い方はどうでしょうか。どういうふうに情報提供すれば、ホームページだけでもいいのか、もっとホームページに動画を入れて、アップテンポの音楽を入れて出すとか、ライブ感覚を大事にするとか、相当工夫していかないと、若い人や新しく船橋に来た方が食いついてくれないと思うのだけれども。栗山さん、いかがでしょうか。何かこういうふうに情報提供すれば食いつきがいいですよと。

○栗山委員

市民委員の栗山です。

私が思うには、やはり先ほども言ったように、そもそも使う SNS 媒体がちょっと不適切かなという部分と、動画という部分でも、今の時代、若年層に響くのは、長い動画ではなく短い動画になってくると思います。短い動画を発信するという意味でも、Instagram などの SNS のほうがいいのかなとは思っています。

それと、あまりにも若年層向けですよというアピールをし過ぎても、逆にくどいという言い方はあれなんですけれども、変にそこに向けすぎると、これは本当に行政としてちゃんとした動画なのかという疑問も生まれかねないので、その線引きは大事なかなとは思いますが。

○明石委員長

ありがとうございました。

五藤さん、同じ「子育てナビゲーション」の冊子を持っているんですけども、私、今日、船橋に着いて、いいなと思って見てぱっと開いたら、公民館と図書館はたった見開きで1ページだけ。何でこんなに少ないか。どうですか、こういう情報の提供の仕方について。

○五藤委員

そうですね。私も行ってすぐ目について、あそこにおられた方といろいろお話しして。見ると本当にページ数が少ないですよ。

○明石委員長

見開き2ページで終わっている。

○五藤委員

ただ、これ自体はすごくいろいろな内容が詰まっている。いろいろな場所もわかるし、知らない幼稚園がたくさんあるんだとか、いろいろなことがすごくわかるけれども、とにかく一番初めの状況が少ないなとは思いました。同じです。

○明石委員長

ごめんなさい、これを含めて、公民館も含めた図書館や市の講演などの情報を発信していますけれども、こういう情報発信でいいのでしょうかということをお聞きしているのですけれども。

○五藤委員

私も、子育ての講師をやったり、いろいろな講師でいろいろな方にお話をします。お母さんであったり。豊かな人は、子供を連れていろいろなところで習ったり聞いたりする機会もあるし、チャンスもあるけれども、なかなか日々の生活が大変で、自分は保育園に預けて働いていて、子供という時間は本当に大事なんだけど、実際、自分のところまで及ばない。そして、そういう親子連れのイベントがあっても、なかなか参加するところまでいかないという方が多い。イベントの数がどうかとか、どこかどうだということよりは、やはり行こうという気持ちになっているところが少ないから難しいのではないか、というのは子育てに関しても思うし、どのターゲット層も同じだと思うんです。シニアも一緒だと思います。

時間はあるけれどもなかなかそこまで行かれないとか、いろいろあるので精査して。本当にイベントはたくさんあるし、どの公民館でも毎月いっぱいやっているんです。何向き、何向き、何向きみたいな形でいろいろなものがあるし、公民館自体でもやっているものが

あります。子育てだったら、ベビーマッサージがありますよとか、公民館の中でもたくさん親子連れが参加できるものはあるんです。じゃあ、どうしてそこがいっぱいにならないか、という原因があるのではないかなとは思いますが。

○明石委員長

ありがとうございました。

では、沼波さん、何か新しい情報発信を考えるのか、今のままでいいのか、何か意見がありましたらお願いします。

○沼波委員

いろいろ皆様のご意見をお聞きして、本当に公民館も充実しているんですよ、中に入ってプログラムを見れば。でも、それもその公民館に足を運ばなければ、何をやっているかは入ってこないわけですよ。

本当にいろいろなパンフレットが置いてあるし、その層に対していろいろ選べるようなプログラムがあるにもかかわらず、やはり、利用者側は自分の目に入ったものにしか集中しないので、他にいいものがあっても自分の志向のものを優先します。

自分が子育ての頃を考えたら、やはり親が興味を持たないと子供はついてこない。私たちの頃は時代もまた違うので、そういうところに出ていって楽しむのが一番楽しかった。だから、何か行事があれば率先して子供を連れて出ていきましたけれども、今の若い世代の方たちは共稼ぎが当たり前で、ふだんはそちらに行くわけです。子供を保育所に預けて、日中くたくたになるまで働いて帰ってくる。そうすると、平日はもちろんそういうものには興味が行かないし、逆に、土日になった場合、今度は子供が先ほども出ていたスポーツをやっていた場合は、そこに親がまた駆り出されるわけですよ。だから、そういう生活のサイクルがいっぱいいっぱい、本当によほど自分の夢、見てみたい、やってみたいというものじゃないと食いついてこない。

ただ、裾野としては、無料の入り口になるようなイベントをもっともっと仕掛けたら違うかなと思うんです。今のお母さんたちは、お金のかかることはまずシャットアウトするので。もうちょっと裾野を広げて。

だから、そういうお母さんたちのアンケートをとってもいいと思うんです。「どういふものだったらあなたたちは行きますか」みたいなことですよね。定期的にそういうアンケートを、それは公民館でもとれますけれども、そういうもので無料でチャレンジできる裾野をもっと広げたら、ちょっと違うのかなと思います。

でも、いくら行政側がいろいろやっても、来てくれる人がその気にならないと膨らんでいかないですよ。だから、そこがすごく難しい。私たちから見ると、ああ、仕事で、子育てで、疲れているだろうな。それをまた土曜、日曜を使って来てもらうというのは、なかなか難しいものだなと、そこでちゅうちょしてしまうけれども、でも、そこを超えて、無料で楽しいことをもっとアピールしたら違うかなと思います。

あと、もう一つは、公民館ができて今に至るまでの間にいろいろなプログラムがありま

すけれども、今は割と固まってきているから、過去を振り返るではないですけれども、過去にすごく人気のあったものをもう一度振り返って、それをまた取り組んでみるのも一つ人を集める手なのではないかなと思います。いろいろな催物をやっていますから、その中でも人気のあるもの、ないものがあつたので、過去のデータがあるのなら振り返って、それをやってみたら楽しいかなと思います。そんな感じです。

○明石委員長

ありがとうございました。

辻先生、ふだんは若い学生と付き合っていますけれども、社会教育からの情報発信で、こういう新しい情報発信をすれば若者のハートに火がつくというものがありましたらお願いします。ちょっと難しい質問ですみません。

○辻委員

実は、私はふだん社会人大学院をメインで担当しているので、あまり若い学生との関わりはないのですけれども。

先ほど市民委員の方からもあつたように、最近は Facebook よりも Instagram だというのはそのとおりだと思います。とはいえ興味がないものには届かない。むしろ、若者がたくさんいるような場所にこちらから出かけていくみたいな機会を増やせば。日頃、全く生涯学習など見聞きもしなかった人たちにこちらから飛び込んでいくみたいな、情報提供かどうかはわからないですけれども、そういった活動を増やせば認知される機会も増えるのかなと思いました。

○明石委員長

ありがとうございました。

草野先生、先生のように困り事を大事にしていく前に、公民館とか図書館でどういう情報発信をすれば、市民に届きますか。

○草野委員

なかなか、情報発信という点では難しい課題だと思います。ただ、家族関係であつたり、子育てであつたり、あるいは経済的な問題であつたり、いろいろな暮らしに係るような悩み、問題、いろいろな不安、そういうことは多くの人を感じていることだと思います。

経済的な困窮という問題以外にも、将来への不安だとか、そういうものは非常に日本社会に多く広がっていることだと思うのです。何か一つのきっかけがあれば、そういう不安なりを共有したり、悩みを打ち明けたり、そこから一歩、自分の不安を解決、悩みを解決していくために踏み出していける、そういうチャンス、機会というものが、偶然それがきっかけであるかもしれない。いろいろあると思うんです。だから、悩みを突破していく入り口になるような情報発信なり、働きかけをやっていくということが大事なのではないかと思います。

21 世紀になってもう二十数年過ぎているわけですがけれども、まさに今、歴史の分岐点とよく言われます。教育にしても、文化にしても、政治にしても、あるいは環境、テクノロ

ジー、平和の問題にしても、いろいろな問題が山積している中で、新しい社会をどういうふうにつくるか。

短期的な個人に関わるような問題に答えていくことももちろん大事なんだけど、もう一歩広げて、人間あるいは個人を取り巻いていく社会、日本だけではなくて世界、より広い視野を持った形での学習活動というか、やや抽象的な言い方になりますけれども、今後の、将来の新しい社会、世界の在り方を考えていくきっかけになるような、より視野の広い学び、学習というものが必要になっているのではないかとも思います。

だから、個に即した個人の問題と同時に、社会、世界というか、より広い大きな視野を持った形での学びのテーマをどういうふうに打ち出していくのか、どういうふうにそれをアピールしていくのかも、公民館や地域の社会教育の大きな課題にはなっていると思います。

だから、近視眼的というのはあれだけでも、狭い問題、領域と同時に、より広い社会、世界というような、広い見通しを持った学びのテーマをどういうふうにアピールし設定していくかも、公民館活動の今後の課題だと私は思っています。

○明石委員長

ありがとうございました。

皆さん、今日のレジュメの 22 ページをちょっと開いていただけますか。リーディングプロジェクトについて、5つのポイントがあるのですけれども、今の草野先生の発言でも、3番の「共生社会」実現のためというのはかなり大事なキーワードですよ。そうすると、生涯学習や社会教育領域だけでは、もう共生社会というのは無理なので、例えば、社会福祉協議会とか児童家庭課とか、他のセクションとの連携を広げなければいけない。

そこで、奥住さん、青少年相談員というのはどこの所管ですか。社会教育課ではないですよ。

○社会教育課長

青少年課です。

○明石委員長

そうでしょう。今日のように社会教育課でやるような活動と青少年課でやるというのは、連携を感じますか。それとも、それぞれが別々にやっている感じがしますか。

○奥住委員

私は相談員の中で幹部のほうではないので、上の方がどういう話をしているかあまりわからないので、青少年課とほかの課の人たちがどういう話をしているとか、お話しされていないとかはあまりわからない状況ではありますが、青少年相談員の中では、「このブロックではこういうことをしているけど、そっちのブロックではどういうイベントが人気のの」みたいな話などは多々上がってきます。

○明石委員長

五藤さん、どうでしょう。どうも日本の行政は、ややもするとタコつぼに入ってほかと

はあまり連携がないような感じがしますけれども、草野先生の発想をいたしますと、一つの課や部局だけでは駄目で、横とのつながりをするためには、公民館が一番地域をよく知っているの、全てを相談する。だから、社会福祉協議会と社会教育課がどうやって連携しているか。やはり困り事というのは、一番いいのは公民館と社会福祉協議会じゃないですか。その辺は、これまででそういう連携はあったのでしょうか、船橋では。

○五藤委員

さっき公民館の数というお話がありましたけれども、館長が変わると、次がすごく変わるといのがたくさんあったり、全部が同じことをやっているわけではないんです。

私たちコーディネーターも、館長によっては密に打合せをして、どういう行事をしようかとか、何をサポートして、じゃあできることは、みたいなものもあるし、逆に言えば、公民館側とコーディネーターではなくて、実行委員会とか地域の人でいろいろなグループができていて、そこがサポートしているところもあります。コーディネーターとしての役割も、公民館によってはすごく強いところもあるし、それから、何でも相談してくださる館長もおられれば、行政は行政で決まったことがまずはというところもある。

だから、今、委員長がおっしゃったように、全体でということよりは、公民館ですら、みんながこれやりましようと言って一本の旗が揚がっているわけではないと思います。この5つの中で、さっきもお話があった共生社会を、役所の中のいろいろ関わっている部署でというのは、とてもハードルが高いことのように思います。

○明石委員長

沼波さん、いかがでしょうか。今の五藤さんの話では、公民館の26館というのは、みんなそれぞれ多様性を持ってやっているんだというけれども。

○沼波委員

そうですね、中央に関しては、社協も公民館の中に入っているんです。あと、さっき言った図書室も入っています。例えば、宮本に関しては、児童ホームもそこにある。海神なんかは児童ホームは離れますけれども、大きなイベントやお祭り、こどもまつり、文化祭となると、みんなそこで一致協力してやっているわけです。五藤さんがおっしゃったコーディネーターも、社協に一人設置されています。

だから、草野さんがおっしゃったように、困り事を相談に来る方はいるわけです。ただ、それがうまく知れ渡っていないから知らない人もいます。もちろん、PRも足りないのかなと思いますけれども、南部に関してはみんな社協も入っているので、常に一緒に会議もします。

ですから、うまく機能していないといたら変ですけども、みんなにそこが周知されていないということですよね。そこで問題解決できた方が、「あそこでこんな相談したのよ、とてもよかったわ。だからあなたも行ってみれば」みたいな、そういった口コミも必要だと思います。

ほかの公民館のことを私はよく知らないのですけれども、社協なんかはセットになって

いるところが多いですよ。どうですか。

○社会教育課長

地区社会福祉協議会が、公民館の中に事務局を置いているところが多いので、子育てサロンとか高齢者向けの事業などは公民館と一緒に開催しているところは多いです。

○沼波委員

宮本なんかは児童ホームも入っていますから、その関わりもあるし、結構いろいろなあれでうまく動いている。ただ、それが広がっていないところですかね。

なかなか人もいないですね。公民館のスタッフも常駐で2人、3人ですから、公民館に何でもかんでもといたら回らない。市に余裕があるのなら、昔のようにもうちょっと増員してうまく。やはり、あっぷあっぷしているところはあると思います。それでいてやることはたくさんありますし。そんな感じですかね。

○明石委員長

ありがとうございました。

それでは、今日は欠席ですけれども、水野さんから、前回、人は少ないし多様な要求が来て全部できないから、もうネットで上げて、デジタルの図書館なり公民館をつくったらどうかという意見がありました。近くに放送大学がありますけれども、あそことは違った意味での船橋バージョンのデジタル公民館、デジタル図書館というのは、若い人から見てどうですか。

○奥住委員

デジタルだと、調べるときに検索してすぐ出てくるじゃないですか。というので考えると、とても便利かなとは思うんです。ただ、先ほどのSNSの運用の話でも思ったのですが、船橋市の市役所のアカウントをつくっても、多分、すぐには知れ渡らないと思うんです。

私も、見ていてすごくいいなと思っても、知っている人がフォローしていないと、ああ、これデマ情報なんじゃないかなと思ってしまって、それこそアンケートにもあった「知っているけれど行かなかった」とかにつながるので、SNSの運用は、すぐには結果が出ないけれども、今後を見たらすごくいいものなのかなというのは話を聞いていて思いました。

○明石委員長

では、市民委員の栗山さん、どうですか。デジタル公民館、デジタル図書館という発想は。

○栗山委員

市民委員の栗山です。

オンラインでコミュニティをつくるという意味ではとてもいい取組なのかなと思う一方で、どうしても調べ事の視点、図書館という意味合いで言ってしまうと、もともと電子で何でもそろそろ時代でもありますし、これからの時代、そもそも調べ事という意味では、恐らく、生成AIの台頭がより顕著になってくると思われる中で、図書館というよりもコミ

ユニティという意味合いを強めてやっていく方向性のほうが、自分としてはいいのではないかなと思います。

○明石委員長

ありがとうございました。

草野先生、いかがでしょうか、デジタル公民館。

○草野委員

発想としては、非常に面白いと思います。考えてみてもいい面白いテーマだと思います。確かに、このリーディングプロジェクトの2番目の「デジタル化社会の対応」というところに関わると思います。デジタル化社会が、特にコロナ以来、急速に広がっているわけですが、そういう流れは当然ありますし、持っている積極性、メリットというのはたくさんあると思います。デジタル公民館という発想も、そういう中で、非常に検討してみるべきテーマだとは思いますが。

ただ、一步立ち止まって、デジタル公民館という発想と同時に、これも前回の会議で私が申し上げましたけれども、戦後の社会教育なり公民館が大事にしてきたアナログ的ないろいろな経験とか蓄積とか、そのメリットも決してないがしろにはいけない。その重要性を再確認していく。

アナログからデジタルへという大きな流れの中で、ややアナログ的なものが片隅に追いやられているような雰囲気、風潮がありますけれども、今、世界の動きを見てみると、逆にアナログ的なものを再評価する動きもあるわけです。スウェーデンやフィンランド、アメリカなどの諸外国でも、例えば、教育なり学習の中で、手書きの持つ効用とか効果、人間の脳の発達における手書きの持つ効果、そういったことも検証されつつあります。

今の世界の状況を見てみると、AIのような最新のテクノロジーの普及に対するいろいろな不安とか批判もありますし、一步立ち止まって、そういう動きについて再検討するという動きもあるわけです。だから、そこはやはり考慮した上でデジタル公民館という発想も検討していくべきだと私は思います。

○明石委員長

ありがとうございました。

五藤さん、どうでしょう、デジタル公民館・図書館というのは。

○五藤委員

今、草野先生がおっしゃったように、私もすごく魅力的ではあるのですが、今それがすぐできるかという点、リスクもすごく大きい。コーディネーターで広報みたいなものを出していても、写真は顔が載ったら駄目だとか、特定されたら駄目だとか、とても難しいことがたくさん出ています。

さっき栗山さんがおっしゃったように、もしデジタルでやるなら、まずはコミュニティ。例えば、夜9時から誰か旗を振ってくださる人がいて、コミュニティとしてそこにみんなが集まって話したりというようなことなら先行きがちょっと見える気がするけれども、即、

デジタルで公民館をつくりましょうということになって、まずはいろいろなことを市がやるということになると、ますますのリスクが考えられるのかなと感じます。

○明石委員長

本当に非常に貴重な意見で、例えば、Facebook みたいな空間のコミュニティがあればいいんだけど、Xみたいに勝手に入るようなデジタルというのは心配だということですね。

沼波さん、いかがでしょうか。

○沼波委員

私はアナログ支持派なので、あまり。草野先生がおっしゃったように、これからアナログがまたすごく……

○明石委員長

貴重ですよ。

○沼波委員

なっていくと思うんです。ここまで来ましたからね。あとはやはり過去に多少戻っていくのではないかなと思うので、デジタル公民館も、皆さんがおっしゃるように、まず小規模から始めて、だんだん大きくしていくというのが無難なのかなと思います。こういうところでいろいろな攻撃をされてしまうと、せっかくのいいアイデアでつくったものがまたしぼんでしまうような、すごく危うさも感じるのです。

ですから、どちらも大事にしたらいかなと。アナログも決してけなすのではなく、大切なものがたくさん含まれていると思いますので。ただ、前回出たとき、発想としてはすごくいいと思いました。デジタル公民館、ああ、新しいものだなと思いました。だから、同時に立ち上げたらいいのではないのでしょうか。そっちだけに偏るのではなくて、こういうものもあるという選択肢の一つとしてあっていいかなとは思っています。

○明石委員長

ありがとうございました。

辻先生、聞こえていますか。

○辻委員

はい、聞こえております。

アナログが大事というのはもちろんそのとおりなのですが、やはり選択肢を増やすという意味で、デジタルの公民館を小規模で始めるということについては大賛成です。

○明石委員長

ありがとうございました。

私も、前回の水野さんの発想は非常に大胆な発想で、やはりいろいろな選択肢を増やすという意味では検討の価値がある。もろ手を挙げて賛成ではないけれども、前向きの意味では大事かなと。そうすると、これまでの公民館のいいところをもっと鮮明に出てくる可能性もある。学びのチャンネルをたくさん増やすという意味では、デジタル公民館という

のを実験的に探ってみる必要はあるかなど、今のご意見を伺いまして感じました。

個人的には、生成AIができて、ちょっとネットで聞けば全部答えが返ってくるから、デジタルのほうはあまりないかもしれないけれども、そうはいつでも、空間のコミュニティをつくった段階で、お互いが情報交換をしながら学びをしていくという意味で、放送大学とは違った発想で、デジタル公民館とか図書館のようなものができればなという感じはしております。

以上、用意した案件がありまして、あと、課長がおっしゃるように、5つのリーディングプロジェクトがありますけれども、今後、この中でどれをもっと伸ばしていくか、削除はしないけれども扱いにちょっと凹凸をつけることを次回検討できればなと思っておりますので、それを頭に入れながら。今年の8月頃にもう1回あるんですか。

○社会教育課長

はい。

○明石委員長

では、以上で事務方にお返しします。

○社会教育課長補佐

事務局からは特にありません。

○明石委員長

事務方からもその他はないので、本当にありがとうございました。以上で、令和7年度第3回船橋市生涯学習基本構想・推進計画検討委員会を終わりたいと思います。

先ほど申し上げましたように、次回、令和8年度第1回は8月頃を予定しておりますので、よろしく願いいたします。本日はありがとうございました。

午後4時36分閉会

9 資料・特記事項

別添のとおり

10 問い合わせ先

船橋市生涯学習推進本部事務局（教育委員会生涯学習部社会教育課）

電話：047-436-2895